第六十五回全国青年大会　三笠宮崇仁殿下への哀悼とともに

石川県青年団協議会

十一月初旬、能美市立粟生小学校の体育館には抑揚のきいた和太鼓の音が鳴り響き、棒をふる二人の青年が獅子を討ち払う姿がありました。明治初期より伝わるとされる地元の獅子舞を全国の舞台で披露するために、粟生獅子舞保存会のメンバーが練習を重ねていたのです。彼らは十一月十一日から十四日にかけて開催される第六十五回全国青年大会の郷土芸能種目に出場することが決まっています。

彼らを支えるのは、過去、石川県代表として全国の舞台で舞った先輩方をはじめとする地元の方々。今大会に向けて、世代を超えて一丸となって取り組む様子がうかがえます。これもまた、全国青年大会の魅力のひとつです。

全国青年大会について

全国青年大会は、全国の青年たちが一堂に会し、スポーツや文化活動などさまざまな競技種目において競い合う競技大会です。参加者の交流と友情を深めるとともに、スポーツと文化の裾野を拡げることに重点を置いているため、トップレベル競技者やプロフェッショナルの競技者には参加資格がないことが最大の特徴とされています。

第一回大会にあたる「講和記念全国青年大会」が開催されたのは、サンフランシスコ講和条約が発効した一九五二年のこと。先日薨去された三笠宮崇仁殿下が来賓としてご臨席なされ、平和の尊さを説かれるとともに、選手たちへの激励の言葉として、「皆さんが本大会において自ら苦しみ、自ら悩み、自ら体験し、新しいものを生み出し、よきものは伸ばし、悪いものは捨てていく、こういうことを体得することが今度の青年大会の真の姿であると思う」とお話になりました。あれから月日が流れ、いよいよ第六十五回となる全国青年大会の開幕となります。

いざ、東京へ　石川県選手団結団式

石川県の選手が全国青年大会に出場するには、原則として予選会である「石川県青年大会」または「石川県青年文化祭」において上位の成績を収めなければなりません。十一月十一日の朝、石川県選手団の証であるブラウンのパーカーを身につけ、予選会を勝ち上がった選手たちが金沢駅に集いました。

石川県選手団結団式

石川県教育委員会生涯学習課の篠原恵美子課長より激励の言葉をいただき、続いて石川県選手団による選手宣誓が行われます。今年は、粟生獅子舞保存会より上野大輝さん、青山匠さんの二名が選手宣誓を行い、珠洲市青年団協議会の松原隼人さんが旗手を務めました。四日間開催される全国青年大会に出場することは、勤労青年である彼らにとって、仕事や家族との折り合いや、金銭的負担、それらをチーム全員が乗り越えなければならないという側面もあります。二人の選手は、ここにチーム全員が集った喜びと、今日までの練習を存分に発揮する決意を示し、石川県選手団の結団を飾りました。

第六十五回全国青年大会、開幕

六十五回目となる本大会、初日は全選手団が東京体育館に集結し、開会式が行われます。駒澤大学吹奏楽部の力強い演奏とともに、日本青年団協議会の山田絵美子副会長を先導に、各都道府県の選手団の入場行進が始まりました。選手団によっては、各々の地域性を活かしたパフォーマンスを加えて入場します。例えば、福井県選手団は地元をＰＲするために全員が赤い眼鏡をかけ、「Ｉ　ＬＯＶＥ

入場行進（福井）

福井」と書かれたタオルを掲げながら行進しました。

災害を乗り越えて出場を果たした熊本県選手団の姿もありました。先の熊本地震の影響で熊本県青年会館にも被害がおよび、青年団の活動にも大きな影響があったものの、多くの方々の支えや、彼ら自身の努力によって、本大会への出場が叶いました。

開会セレモニー

大会長挨拶では、日本青年団協議会の照屋仁士会長が、第一回大会における三笠宮崇仁殿下のお言葉を引用し、哀悼の意を表するとともに、私たち青年一人ひとりがこれからも平和を希求していくことを確認しました。

試合や審査会の様子

全国青年大会の競技種目は多岐にわたりますが、石川県選手団が出場するのは、バスケットボール、フットサル、ボウリング、ダーツ、意見発表、郷土芸能、のどじまん、写真展の八種目です。中でも、意見発表種目の会場はほぼ満席の状態で、独特の緊張感と熱気に包まれていました。

意見発表

意見発表とは、各々の青年がこれまでの青年団活動での経験を踏まえ、様々な問題提起や主張を行うもので、いわゆるスピーチコンテストに類似した種目です。前回大会では石川県の横井なつ子さん（金沢市青年団協議会）が最優秀賞を獲得するという快挙を成し遂げています。今大会では、珠洲市青年団協議会の坂本洸士会長が演台に立ち、青年が成長できる場としての青年団の重要性や、これからの日本における地方の役割などについて語りました。結果として入賞には至らなかったものの、地元への愛着がにじみ出るような意見発表となりました。

交流競技として前回大会から新設されたダーツ種目では、石川県青年団協議会の吉田昌孝常任理事が全国三位の成績を収めました。あまりダーツ経験が無い（本人談）とのことでしたが、隠れた才能が発揮されたのか、本人さえも驚く結果となりました。

郷土芸能種目に出場した粟生獅子舞保存会は、一番手でステージに立つこととなりました。出演直前、楽屋で待機する選手たちは落ち着いた様子で、これまでの練習の成果を披露するのが待ち遠しいような表情を浮かべていました。ステージ上では、練習の成果を遺憾なく発揮し、見事、努力賞（三位）を獲得しました。

粟生獅子舞

第六十五回全国青年大会

石川県選手団一覧および成績（入賞者のみ）

【郷土芸能の部】
粟生獅子舞保存会（能美市）
努力賞（三位）
【ダーツの部】
吉田　昌孝（羽咋市）　三位
【バスケットの部】
中島クラブ（七尾市）
【フットサルの部】
鉄人倶楽部（宝達志水町）
【ボウリングの部】
金沢市青年団協議会（金沢市）
【のどじまんの部】
松原　隼人（珠洲市）
【意見発表の部】
坂本　洸士（珠洲市）
【写真展の部】
坂本　洸士（珠洲市）
米田　拓朗（金沢市）

閉幕、そして第六十六回大会に向けて

江戸川区総合文化センターの小ホールで行われた閉会セレモニーには、各都道府県の青年団のシンボルである団旗が集結しました。大会長である日本青年団協議会の照屋会長は閉会挨拶で、来年開館となる「三代目　日本青年館」について述べました。新国立競技場の建設に伴い、移転を余儀なくされた「二代目　日本青年館」は、いよいよ平成二十九年七月に開館します。第六十六回大会は新たな青年の拠点で再び集うことを誓い、第六十五回全国青年大会の閉幕となりました。